

俳句は無限か、あるいは人間の創造性ということについて

後藤郁夫

1

俳句は無限に作れるか？

いつの頃からか、そんな問いが私の頭脳の片隅に宿っていた。それが明確に意識されたのは、私の会社で同じ契約社員として校正の仕事をしているM嬢のおかげである。どういう経緯でそうなったかは思い出せないが、昼休みに偶々話が俳句におよび、彼女が「俳句は基本的に、五・七・五の十七音と決まっているから、俳句の数は限られているんじゃないかしら」と疑問を呈した。機先を制せられたということもなくはないが、下手の横好きで些か俳句に嵌ったこともある身としては、その疑問に一瞬怯みケチをつけられたような気分になった。彼女もさほど確信的な疑問ではなかったようなので、その場は適当に繕

い暫し考えた。

二三日して私は彼女に、「やはり俳句は無限に作ることができる。何故なら私一人にしても、私の体験や思考や感覚は無限に細分化でき、あとは私にそれを俳句に表現出来る能力さえあれば無数に作れるはずである。まして俳句人口二千万人がかく作れば無限ではないか」と。しかし、彼女は五・七・五の十七音という限定にこだわり、私の言に納得しなかった。その日帰宅して寝ころんで本を読んでいたとき、ふとその話を思い出し、以下の考えが頭を過ぎった。

M嬢の言い分はもつともかもしれない。日本語数をもし『広辞苑』収録の26万語、季語を約3万語とし、五・七・五の十五音であるということと必ず有季であるとすれば（従って無季や字余り字足らずを認めない）、そして、世界に現存するものの何倍もの容量と速度の巨大

コンピュータにインプットしたら、日本語の語彙数が増えないかぎりコンピュータ中には、日本語で俳句を嗜む人が過去・現在・未来において作る全ての俳句が入っているのではないか。そんな巨大コンピュータは、当然無意味な大量の五・七・五の組み合わせの削除機能も備えているだろうから、有意義な五・七・五の俳句だけ残し紙媒体に印刷して打ち出せば、たとえ地球何周分になるとしても有限ではないか。

理数的思考に弱い私はこの結論に確信がもてなかつたので、即座に知人の物理学者と北大理学部出身の友人の二人にその疑問を電話で投げかけた。彼らは二人とも即座に「無限ではない」と宣った。二三日後に上記物理学者に会うことがありその数を糺したら、日本語文字「いろはにほへと」47文字の17乗、濁音半濁音を加え約70文字の17乗といったところだろうかとのことだった。確かに天文学的数字ではあるが、単純な数式で算出できる有限数であることに変わりはない。だとすればその中には、間違いなく芭蕉の句も虚子の句も漱石の句も蛇笏の句も、そして驚くべきことには将来作られるであろう名句や迷句も駄句もすべて印刷されて既に存在しているのである。私は突如名状しがたい奇妙な感覚に襲われた。俳人にとって創造とは一体何なのか。句作に没頭し苦吟し辛苦してひねり出した俳句は、既にいつかは出現する大型コンピュータに書記されている！我々人間に残されていることは、この地球何周分かの紙に印刷された俳句の中から我々の価値基準に則り秀句を「発見」すればいいだけだからである。発見の

過程の判断基準は、時代と人々の価値観により様々ではあるが、私を襲った異様というか奇妙というか摩訶不思議な感覚とは、将来にわたり人類の創造しうるすべての俳句がその地球何周分かの紙媒体には既に書き込まれているという事実である。私はこの俳人を愚弄し冒瀆しかねない、しかし厳然たる事実に戦慄した。そのことを翌日彼女に話したら、彼女はやっと納得してくれた。

2

しかし、私はその奇妙な感覚を引きずりながら以下のようなことを考えた。

人間にとって「創造」とは何か。「創造」とは「発見」の別言に過ぎないのではないかと。話はこうである。

夏目漱石の短編に「夢十夜」がある。その第六夜は有名な運慶の話。運慶が護国寺の山門で大勢の見物人を後目に、木に向かって自在に鑿を揮っているのを見たある男が、「なに、あれは眉や鼻を作るんじゃない。あの通りの眉や鼻が木のなかに埋まってあるのを鑿と槌の力で掘り出すまでだ。丸で土の中から石を掘り出す様なものだから決して間違ふ筈はない」と。それじゃ自分にも出来るだろうと思ひ、家に帰ってやってみたが仁王はみつからない。明治の木にはついに仁王はいなかった。

漱石はこのたった二頁ほどの短編で何が言いたかったのか。あるいは明治という時代を揶揄したと読めなくもない。しかしやはり、運慶はそれほど天才であったというのが素直な理解であろう。上記の私の議論に引きつけられ、漱石もまた、天才にとつて「創造」とは所詮「発見」であると言いたかったのではなからうか、と。

しかし、私はこんなことも考えた。プラトン哲学の核心に想起説とこの力がある。我々は生まれ出る前にすでに完全な知識をアイデアとして所有しているが、出生と同時に全てを忘却してしまい、それらを理性の力に助けられてこの世で想起するという説である。従つてプラトンによれば、人間は生まれ出て自らの力で新しい知識や学芸を創造するのではなく、ただ前世で所有していたアイデアを部分的に徐々に想起するだけである、と。私の文脈に引き込めば、我々は「創造」ではなく「発見」するのである。上記大型コンピュータは、比喩的に言えばプラトンのアイデアの世界であり、我々日本語で句作する者は、手間暇をかけ頭脳を傾けてこの忘却したアイデア世界を想起しているにすぎないと言つことは、果たして牽強附会であらうか。

話は更に続く。西欧においては、キリスト出現以後長きにわたつて真理はすべて『聖書』に記されており、創造という行為は神のみに許された行為であった。人間はただこの『聖書』の真理を読経・誦経するか、敷衍するか模倣するだけであり、人間が主体となつて創造するということは、正に神をも怖れぬ傲慢の所業と言わねばならなかつた。しかしやがて時移り、近世近代になつて宗教の世俗化とともに神

は後景に退き、人間が前景に現れ「創造」の中心主体に躍り出る。19世紀ロマン主義と進化論に後押しされて、無から有を生み出すと思われる天才や個性をもつた「創造的人間」こそが神となり崇められることとなる。我々は現在、テレビ・コマーシャルに新聞紙上に会社の中に街中の広告に、日常生活の至る所で「クリエイティブ」や「クリエイター」という言葉が最高の価値を付与されて氾濫している光景に立ち会つていないであらうか。

だが翻つて考えれば、我々人間はかくも「創造的」であり得るか。日の下に新しきものなし、とも言つ。 「創造力」 神話とは所詮近現代人の生み出した迷妄ではないのか。

丸谷才一によれば(『梨のつぶて』)、一九〇〇年にジードは「文学における影響について」という講演をおこない、そこでこんなことを言っている。「個性のない人間ほど、個性をほしがり独創的になる」とする」と。「影響を怖れている者はじつは自分の魂の貧しさを告白しているのだ」。「偉大な芸術家は模倣することを決して怖れませんでした」とも。ジードはここで古典主義の伝統復興を訴えているのである。

突如「創造とは伝統の発見である」なんていう、いかにも小林秀雄が福田恆存がどこかで書いていそうな厳肅なテーゼが私の口をついて出た時には、我ながら思わず笑つてしまった。

そして、ここまで来てやっと私は自分のテーマである「教養論」に辿り着いたような気がする。

人間は無から有を生み出すことができるだろうか。勿論、答えは否である。いかなる天才や独創的人間といえども、既成のアイデアの素材を欠いては新しいアイデアを生み出すことはできない。ジードの言を敷衍すれば、偉大な芸術家は、彼が偉大であればあるほど、ホメロスやヴェルギリウスやキケロ等から始まって中世・ルネサンスの偉大な古典を堂々と模倣・パロディ化・引照・被影響化しながら、それらを「再発見」し数パーセントの α を加えて新しい作品を創造してきたのである。

小学生の頃だったろうか、私は何かの本で数学者のポアンカレがある日馬車に乗ろうとして踏み台に足をかけた瞬間アイデアの閃きを得たという逸話を読み、「ああ天才とは凄いものだ」と感嘆するとともに、私もポアンカレたれと自転車のペダルに足をかけてみたが、何のアイデアも閃かなかったということがある。この話も私の議論に引き寄せれば、ポアンカレは頭に詰まっているあらゆるアイデアを駆使して四六時中問題を考え続け、偶々馬車の踏み台に足をかけた瞬間それらのアイデアの新しい組み合わせが閃いたということであろう。

私見では、「創造」とは、畢竟広い教養を形成する既成のアイデアの新しい組み合わせの「発見」の謂いである。既成のアイデア $+\alpha$ こ

そ「創造性」と言うべきである。従って、土台となる教養は広ければ広いほど組み合わせは何乗倍も多くなり、「発見」される新しいアイデアの可能性も広がるはずである。上記2節の末尾のテーゼを私流に言い直せば、「創造とは、あるいはオリジナリティとは、既成の教養の新しい価値観や感覚に基づく再発見である、そしてその新しい価値観や感覚を育むものもまたベースにある広い教養である」と。

しかし、教養については竹内洋も言うように、戦後の高度経済成長による農村性の消滅とともに教養主義も「教養」言説も没落してしまった（『教養主義の没落』中公新書参照）。六〇年代後半の大学紛争は「知性の府」の虚構性を突いた。上記私見は、嘗て光り輝やき今や絶滅危惧種となり果てた「教養」再興を、時代錯誤的に求めているに過ぎないのだろうか。いや、そうではなからう。

私も、確かに社会の階段を上昇するための、他者への優位性を顕示するための手段（資本）としての「教養」＝教養主義は無用であると思う。しかし、私は編集といたささやかな職業を通じてにしかすぎないが、つくづく感じてきたことがある。それは、東大京大を頂点とするアカデミズムの研究者は、確かに何事かについての専門家ではあるが広い教養に欠ける、彼らは何事かについてのプロであるが故にプロ特有の思考の轍にはまり込んでしまい、本来分節不可能な現実を強引にその思考の轍に落とし込むことよってしか現実が見えなくなってしまうている、広い教養に基づく健全なアマチュアリズムが欠如している、と。そしてそのことが、結局彼らに社会から付託された「研

究」そのものをつまらなくさせているのではないか。彼らは今や、知識人というよりは、霞ヶ関のキャリア官僚と同質のテクノクラート（専門家集団）にすぎないのではないか。

されど、大は文化の脊梁をなすところの、そして小は人生をよりよくより深く生きるための知恵としての、そして何よりも知的テクノクラート（＝大学教員）にとつては知のこわばりを揉みほぐすための真の教養の再建は急務ではないか。

かつて改革派の旗頭経済学者として、一世を風靡したベストセラー『入門 マクロ経済学』を書いた中谷巖は（彼がその印税で建てた自宅は「マクロ御殿」と揶揄された）、今回の世界恐慌に際して『資本主義はなぜ自壊したのか』を著し、かつての立場を悔い改め、アメリカ礼賛からブータンの「小欲知足」を旨とするGNH（国民総幸福）礼賛へと転向した。中谷には現在ブータンで何が起こっているのか、もはや懺悔の眼鏡しかもたない彼には現実は見えないのである（『朝日新聞』夕刊2009年2月12日9面「GNHの構造問題」参照）。中谷は率直に、若い日にアメリカに留学しアメリカの繁栄に圧倒され憧れて、ただひたすら新古典派経済学の勉強しかしてこなかったと告白している。私の推測では、中谷には可能性を秘めた様々なアイデアの選択肢が欠如していたが故に、空白を埋めるように一気に百八十度反対極にぶれざるをえなかったのである。我々は似たような歯止めなき転向現象を明治以降とりわけ昭和史において多く見てこなかっただろうか。私が短くない編集者生活を通して著名大学教員に感

じてきた知性貧血症のテクノクラートの無惨な姿がここにあるように思われる。

これは全くの蛇足だが、上記中谷の新刊はまたしてもベストセラー街道を快走中とのこと。彼は次は一体何を建てるのだろうか。

「俳句は無限に作れるか」という素朴な疑問から出発した私は、ついに私の持論である教養論へ行き着いてしまった。私の議論は果たして無稽の論であろうか？

